

豊橋市美術博物館友の会だより－2010年－春号

Vol.75
FU風伯HAKU
Spring 2010



アトリエ訪問

美の探求者～高畠郁子先生をたずねて

2009年の暮れも押し迫った12月25日、念願のアトリエ訪問をする幸運に恵まれた。アトリエといえば、作家にとって作品を生み出す内なる場所。簡単に拝見することのできないイメージがあり、小池町のご自宅へ向かう車中では期待とともに緊張があった。

昭和の初め千葉でお父様を亡くされ、赤ちゃんだった高畠先生はお母様に連れられ実家のある豊橋に来られた。以来80年住まわれているご自宅は築100年とうかがったが、きれいに拭きこまれた柱や欄間など、昔ながらの重厚な木肌の美しさに見とれてしまう。塵ひとつなく、整然としているのに驚いていると、「私はお掃除が大好きでね。絵を描いていて疲れると気分転換にお掃除をするよ」と朗らかにおっしゃった。居間から望む、植込みがきれいに刈り込まれた日本的なお庭は、かつて中村正義が写生し作品の背景に描いたこともあるという。

階段を上がって広々としたアトリエに入ると、床に制作中の作品が置かれていた。日本画は、膠で溶いた岩絵



高畠郁子先生

具が滴らないよう床に寝かせて描くのだそうだ。室内を見わたすと、幾段もの棚いっぱいに並べられたガラスの小瓶に入った美しい岩絵具に引き寄せられた。色のバリエーションは、鉱物から作られたとはにわかに信じ難いほど豊かで鮮やかだ。そのほか世界各国の民族の様々な飾り物があり、独特の温かな雰囲気を醸し出している。友の会の研修旅行などでご一緒した先生の印象は明るく「陽」の人であり、異国文化をも包み込む天真さは画室にも表れていた。南側の大きな窓からは暖かな日差しが部屋中を満たし、楽しい会話の時間が予感された。先生は作品の横に座って膠を溶かれ、編集委員の私たちはそのままに座ってお話をうかがい始めた。



画室の岩絵具と筆

高校時代、美術の石川新一先生に勧められて水彩画を描いていた先生が初めて日本画の筆をとったのは、中村正義の画室だったという。当時、日本画の絵具さえ持つておられなかったのに、それが今日の高畠先生へとつながる画業の入り口だったのだと思うと、ことさら感慨深く印象的であった。

その後、1951年(昭和26)に中日美術教室とともに開設したメンバーは、中村正義、平川敏夫、大森運夫、星野真吾であった。皆、日本画をそれぞれの独自性を持って極めた画家たちである。ともに行動し、語らい、刺激し合って濃密な時間を過ごしていらしたのかと思うと、そ

のスケールの大きさに今は驚くばかりである。

星野眞吾先生は高畠先生の夫君であり、リアリティを追求した前衛的な日本画は、全国の国公立美術館に収蔵されている。1996年(平成8)、「人間を作り育てることこそ価打ちがあり、人間を作っていくなければだめだ」と考えていた星野・高畠ご夫妻からの寄附金によって豊橋市に美術振興基金が設立され、後進の登竜門として「トリエンナーレ豊橋－星野眞吾賞展」が開催されている。全国的に知名度を上げつつあるこの賞は、若手作家の育成という目的のみならず、豊橋とアートを結びつける有意義な芸術文化賞であり、地元地域自体がもっと盛り上がる公募展になればと願っている。

お二人はそれぞれ長男長女だったため、家意識の強い当時は結婚できると思わなかったそうだが、1964年(昭和39)にめでたくゴールインし、高畠姓から星野郁子になった。「星野のことを尊敬していた。いい作品を描かせたかった」という高畠先生は、星野先生のことを語る時、本当にうれしそうだ。愛情深い想いが伝わってきて、こちらまで幸せな気分になる。

しかし、お互いが画家という職業である。個性が激しくぶつかり合う時は、尋常ならざるものがあったのではないか。ひとつ屋根の下に暮らすのは、どうにも難しそうである。そう思ってお聞きすると、先生はこともなげにいう。「ライバル視は全くない。絵に対して挑戦者であり続けた星野から良い影響を受けたし、芸術家として伸ばしたいと思っていた。夫婦というより、同志という気持ちだね」。また幸いなことに、所属団体展への出品作の制作時期が星野先生は春、高畠先生は秋とされていたので不都合はなかったそうである。しかし何より、星野先生に対する絶対的な信頼が、ひとつ屋根の下での生活を可能にしたのであろう。



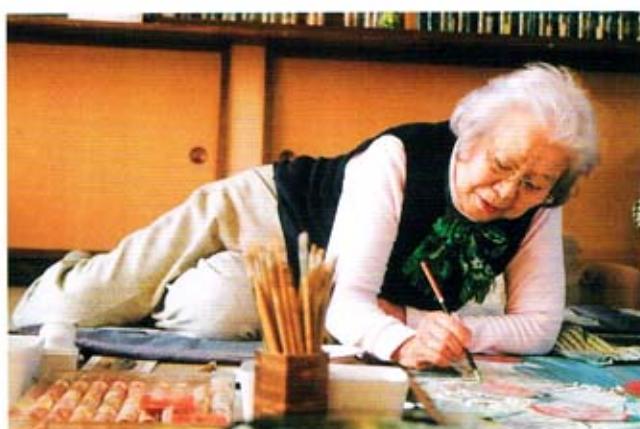
1974年(昭和49)、高畠先生は45歳の時に初めてインドを旅行し、遺跡・レリーフ・文様・彫刻などから多大なインスピレーションを得た。曼荼羅やタントラをモティーフとして、インドの宗教や歴史のイメージとそこに暮らす人々を重ねて描くようになる。その後も訪れ、高畠郁子といえば、インドを描いた緋色の細密作品を思い浮かべるほどだ。しかし現在アトリエで制作中の作品は、今までの赤い絵ではなく、緑や青などの彩色に銀彩を施したもの。高畠郁子は前へ進んでいる。

最近の作品は色彩の変化だけでなく、インドやチベットのモティーフから一転して、お遍路・仏像・四天王・お地蔵さま・こきりこの祭・鎧兜の戦国の武士といった日本の文化を取り上げている。絵はご自分の心象表現であり、自画像のようなものだとおっしゃる。「他人とは違う自分の心の中の世界をどう表現するかが難しい。いつになっても完成したという気になれず、大海原を漂っているような感じだね」。展覧会への出品は、時間切れで筆を置くことが多いというが、色彩の交響や幅広い表現を貪欲に研究され、まだまだ安住しようとしない美の探求者としての姿がそこにある。

「自分を見つめ、突き詰めていくしかない。変化したい。改革し、新しい試みをしたい。全てが勉強だ。過去に生きず、前を向いて、自分自身の方向を探る。本質を研ぎ澄ましていくように一生懸命やるしかない。常に真剣勝負だ」。日本画家・高畠郁子の核心に触れ、画家としての長い道のりが決して平坦ではなかったことをうかがい知ることができた。

最後に、「好きなことをやっているのだから幸せだと思うよ」と、先生はしめくくられた。高畠先生の末永いご健康と、新たな地平への飛翔を願わざにはいられない。

(風伯編集部)



友の会コンサートについて考える

心が動くにはいつもとは違う空気が大切だ。特別な絵の前で、他には無い空間で音楽を聞くことができたらどんな気分が味わえるのか、胸がときめく。それは友の会の会員だけに許された贅沢。あなたはその快感を味わったことがありますか。

【友の会コンサートの歴史】「坂口紀良～ホルンとチェロのタベ」2004年／「加藤訓子 マリンバ&パーカッション～大地からあなたに」2004年／「杉浦充～独筝(ひとりごと)」2005年／「ミニ・コンサート(ソプラノ・フルート・ピアノ)～クールベ展」2005年／「ジュスカ・グランペール(ギター・バイオリン)～森のなかの音乐会」2006年／「バイオリンとピアノのタベ～ヨーロッパ絵画名作展」2007年／「森のコンサート～チェロとバイオリンのタベ」2007年／「林美也子筝コンサート～上村松園・松菴・淳之展」2008年／「テルミンコンサート～トリック・アート展」2009年

1.今までのコンサートの評判、評価について

①今までのコンサートの評価をどのように受けとめていますか？

・最初は「なぜ美博でコンサート？」と思いましたが、美術と音楽の両方を楽しむ場として多くの方に足を運んでいただけたようになり、とてもうれしく思っています。会員のみなさんに一度でも多く美博に来ていただき、楽しい時間を過ごしていただきたいと思います。

・季節や展覧会の内容と関連した楽曲や楽器を演奏していただき、よい評判を得ています。

②参加者からはどんな感想、希望や期待の声を聞いていますか？

・コンサートホールではなく美博で開催されることで、音楽と絵画がつながり、鑑賞に相乗効果があるようです。また、黄昏時の演奏は、移り変わる光を感じながら素敵なお雰囲気の中で楽しめるといい評判です。

③参加者はどんな方が多いのでしょうか？

・友の会は高齢者や女性が多いのですが、若い方や男性も多く見られます。音楽が特に好きな方でしょうか、研修旅行や講演会などではあまりお会いしない方も多いように思います。

2.コンサートのねらいと考え方

④どうして美術館の中や敷地内でコンサートを開催することを考えたのですか？



坂口画伯と名フィルのチェロ奏者ら



加藤訓子さんマリンバコンサート

・最初は会員拡大が目的で、会員だけのプレミアムな特典として企画しました。企画展以外にも美博に来館する楽しみを創出したいと考えたのです。

絵画を楽しむように音楽を楽しむ。美しい音楽に触発され、絵の中の世界に思いを馳せて、幸せなひと時を過ごす。これが美博でのコンサートの醍醐味だと思います。

また、豊橋在住・出身の音楽家たちを紹介できるチャンスでもあります。

⑥毎回の企画はどのように考えてきましたか？

・最初の頃は、この美博の空間で楽しめる音楽、聴きたい音楽は何だろうと考えていました。会場も、講義室、エントランスホール、裏庭と可能な場所が増えていき、展示室の作品の前でも演奏会ができるようになりました。

最近は、企画展の内容に関連した楽器・楽曲を取り上げ、美博でのコンサートならではの音乐会として楽しんでいただいている。

⑦特に印象に残っているコンサートとその理由を教えて下さい。

・加藤訓子さんのマリンバコンサートのときに、あまりコンサートを開催していなかった美博で「よくやれたね」と、参加された方にはめられました。浜野龍峰さんの書による懸垂幕を使ったディスプレイも素敵でした。

・杉浦充さんの筝の迫力は素晴らしい忘れられません。

・野外の裏庭で開催したジュスカ・グランペールのコン

「豊橋市美術博物館友の会の方針と行動」その3

サートは、「美博にはこんな素敵なかつがあったのね」と喜ばれ、大竹広治さん(バイオリン)と杉浦雅子さん(ピアノ)のヨーロッパ絵画展のイメージにあわせた音楽とお話をとても評判がよかったです。

・林美也子さんの筝は、展示室の上村松園の絵の前で奏でられ、松園の時代へ想いを駆せながらうつとりと聴き入りました。

・友の会の名司会者の存在も欠くことができません。当日開演前の無理な依頼にもかかわらず、私たちが音楽家に聞きたいことや、友の会からのお知らせを楽しくユーモアたっぷりにトークしてくださったことが印象的でした。

・美博の中で行うコンサートは、大きなコンサートホールで聴くのとはまた違い、息がかかるほど近くで話を聞いて、音楽家に親しみを感じることができるという贅沢さがあります。

3. コンサートのおもしろさと苦労する点

⑧企画する側として、どんなことに喜びやおもしろさを感じますか？

・この地方で活躍する音楽家たちの今の活動に触れられること。演奏者も観客の皆さんも、楽しい時間を共有して喜んでいただいていること。

・自分自身が聴きたいコンサートが実現されること。会員の皆さんと感動を分かちあえること。

・絵画と音楽が見事にマッチし、より深く作品を鑑賞できたと感じること。

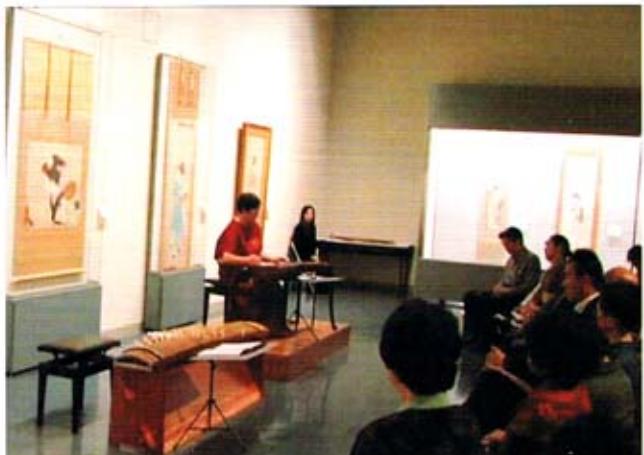
⑨どんなことで悩み、苦労されていますか。

・十分な予算がなく、演奏者に無理を言わなければならぬこと。出演料を充分にお支払いすることができないので、プロの演奏者である方々に失礼ではないのか悩みます。

4. これからコンサートのあり方と構想

⑩これからコンサートをどんな風にしていきたいと考えていますか、またその具体的な内容やアイデアを教えて下さい。

・年間計画を立てる、あるいは時期を固定化すれば、時間



作品の前で絃琴を奏でる林美也子さん

に余裕をもって交渉できるのではないかでしょうか。予算もある程度確保し、十分とは言えないまでも無理のない交渉ができるとよいと思います。

・具体的な案としては、松井守男展に合わせてピアノコンサートを考えています。

・参加者に好きな楽器を持参してもらい、見た絵から感じとったイメージで演奏してもらうという企画はどうでしょうか。

5. あなた自身の気持ち

⑪ご自身のこの事業の責任者としての感想はいかがですか？

・館内だと定員が100名程度に限られるので、今まで入場をお断りしたことはありませんが、今後企画によってはお断りせざるをえないかもしれません。そんな注目を集めますばらしい企画をしたいと思いますが、その時は参加できない方に申し訳ないとも思いますし…。ジレンマがありますね。

・まだまだ模索段階です。これが一番豊橋市美術博物館に合っている、と自信を持って提供できるコンサートを編み出していけたら、と試行錯誤の連続です。

6. その他

⑫会員に希望することなどありましたらお聞かせ下さい。

・会員の皆さんからも、ご希望、ご提案をいただきたいと思います。

・特に多くの若い人たちに館に足を運んでいただきたい。年配の方は若い人たちを誘ってください。若い方はお友達を誘ってください。

「豊橋市美術博物館友の会の方針と行動」を考えるシリーズもあと1回です。「友の会のあり方と今後について考える」が最終回のテーマです。あなたは会員拡大・研修旅行・コンサート特集に何を感じられましたか。最終回は一緒に考えましょう。あなたの意見をどうぞお聞かせ下さい。あなたの友の会です。

(風伯編集部)



ソプラノ・フルート・ピアノによるコンサート

美術博物館の展覧会

愛知県美術館 平成21年度 移動美術館 「ひかり・いろ・かたち」

3月28日[日]まで開催《入場無料》 月曜休館(ただし3/25は開館、翌26日は休館)



《見どころポイント》

●陽光が穏やかに耕地や積藁に降り注いでいる久米桂一郎の《秋景》。前回の移動美術館で一番人気のあった作品です。戸外に光を求め、生き生きとした色彩で描いた風景画も見どころです。



●岸田劉生《高須光治君之肖像》のモデルは豊橋出身の洋画家です。当館にも類似の作品があり、2階常設展で展示していますので、両者を見比べてみるのもおもしろいでしょう。



愛知県美術館蔵



当館蔵

●日本画にも独特の色と形を追求した作品があります。出品作家は東山魁夷・小松均・片岡球子など。昨年12月に死去した平山郁夫のシルクロードの情景《楼蘭の遺跡・昼》や、大胆な筆致で自然のエネルギーッシュな形象を描いた中村正義の《爽爽》は必見です。郷土作家では、星野眞吾・高畠郁子の代表作も出品しています。

●裏庭に面したラウンジを暗く遮断し、山口勝弘《港No.2》(チラシ裏面掲載)を展示します。光・色・形を駆使したユニークなオブジェです。

●木村定三コレクションも見どころのひとつです。今回は、熊谷守一、須田赳太、長谷川利行、香月泰男といった近代洋画史に残る個性的な作家を紹介しています。なかでも熊谷守一と木村氏との交流は深く、200点を越える屈指のコレクションから、今回は3点を紹介します。鮮やかな《百日草》(右上)の色と形、《白仔猫》の無垢な愛らしさ、抽象画のような《雨滴》の不思議な形象など、いずれも小品ながら見るものを独特的の世界に誘う味わい深い作品です。

「キッズ・ガイド」2種(小学1~4年生向/小学5年~中学生向)の配布、熊谷守一《白仔猫》のぬりえと応募・掲示コーナーもあります。ぜひ、お子様連れでお出かけ下さい。

二川宿本陣資料館の展覧会

信仰の街道「秋葉道展」

3月22日[月・祝]まで開催



江戸時代の庶民の旅は、伊勢参宮に代表されるように社寺参詣がその主たる目的でした。遠江国(現静岡県浜松市)にある秋葉山は、火防の神として信仰を集め、東北や関東から伊勢を目指す旅人が途中で多く立ち寄る場所でした。秋葉道は山深い尾根道ですが、往時には旅人が大勢行き交いにぎわいをみせっていました。本展では、東海道を掛川より秋葉山へ、秋葉山より鳳来寺・新城・豊川稻荷を経て御油にて東海道へ復する秋葉道を紹介します。

歌川広重
「本朝名所 遠州秋葉山」(複製)

二川宿本陣まつり「ひなまつり」

3月22日[月・祝]まで開催



3月3日のひなまつりは、「上巳の節句」「桃の節句」とも言われ、江戸時代に女児の初節句を祝う節句となり、現在でも女の子の幸せを願って様々な雛人形が飾られています。

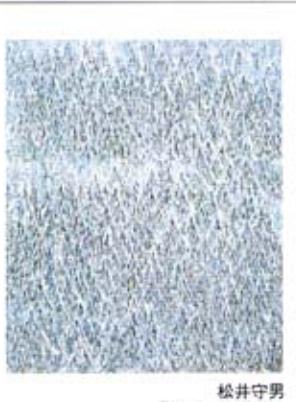
本展では、二川宿の旧家に伝来する江戸末期の雛人形や明治や大正の内裏雛を中心に、昭和30年代までよく見られた御殿飾り、豪華な七段飾り、雛人形とともに飾られた天神、市松人形、土人形など様々な雛飾りを展示しています。また、つるし飾り愛好会のご協力により、華やかでかわいらしきつるし飾りも紹介しています。

今年の展示風景

22年度の会員更新手続きをお願いします

下記のいずれかにより会費をお支払いください。

- 美術博物館窓口
- 郵便局
- ※同封の払込票をご利用ください。
- 銀行
- ※下記口座へお振込みください。
- 三菱東京UFJ銀行 豊橋支店
普通 4806768
- 豊橋市美術博物館友の会



22年度会員証

春の研修旅行

*詳細は同封の申込みチラシをご覧ください。

日 程○5月13日(木)～15日(土)

1泊・2泊の2行程から選択

内 容○長崎市内見学、松井守男画伯との懇親会

総会のお知らせ

日 時○5月22日(土) 午後1時30分～

場 所○美術博物館 講義室

総会終了後、松井守男先生をお迎えしてご講演をいただく予定です。(午後2時頃より)

ぜひご参加ください。

旅行アンケートから

・初めて研修旅行に参加し、ちひろ美術館にも初めて伺い、広大な敷地の美術館に感動。マリー・ローランサンが好きなので、ちひろ作品と一緒に出会えてとてもよかったです。あと30分くらい時間がほしかったです(コーヒータイムがとれず残念)。お昼のおそばもとてもおいしかったです。

・松本市美術館は、常設展(草間彌生)のスペースがたっぷりしていて、建物全体の天井高もあり、ゆったりしている。おしゃれなレストランもよかったです。ちひろ美術館は、なんといっても自然環境に恵まれ、美術館が自然の中に溶け込んでいる。建物に木材がふんだんに使われていて心地良い。心優しい絵に囲まれて幸せ感が高まった。

・松本市美術館は建物に光の差し込む窓がきれいで、草間彌生の渡り廊下が素敵でした。市民が参加している企画を見ることができた点も良かったです。日帰り旅行もたまにはよいと思います。

・石井鶴三展は見ごたえがありました。松本の文化の高さを感じます。天気もよく、美しい景色に酔いしれて素敵な一日でした。こんな会があったなんて、早く知っていればよかった。



安曇野ちひろ美術館にて

22年度展覧会スケジュール

美術博物館

～コルシカに生き、光を描く～ 松井守男展	7月17日(土)～8月22日(日)
すりもの展[錦絵・引札・包装紙] -印刷物にみる豊橋の近代-	8月28日(土)～10月3日(日)
モーリス・ユトリロ展 -パリを愛した孤独の画家-	10月22日(金)～12月5日(日)
豊橋市美術博物館収蔵品展 2000～2010	2月12日(土)～3月20日(日)

二川宿本陣資料館

三人の広重展 -初代・二代・三代広重の描いた東海道-	4月24日(土)～6月6日(日)
三河・遠江の城郭展	7月24日(土)～9月5日(日)
海の街道展 -伊勢湾を渡る	10月9日(土)～11月14日(日)

*そのほか五節句にちなみ展示、体験講座や演奏会などを開催します。

収蔵品紹介

[室内(観葉植物のある)]

札幌に生まれ、東京藝術大学の油絵科に学んだ笠井は、卒業後フランス政府給費留学生として国立パリ美術学校に学び、帰国後は愛知県立大学で教鞭をとるかたわら、個展やグループ展を中心に活動を展開しました。

初期の頃は朱と青のコントラストが鮮やかな作風で、風景、人物、静物と多岐にわたるモティーフを手がけていましたが、昭和40年代半ばより、くっきりとした輪郭線で色面を際だたせる画風を確立し、身辺の器物を主題に明快な色彩がひびき合う室内空間を構築するようになります。

本作品は画家のアトリエ空間を描いたもので、白いテーブルの半円、ゴムの樹の垂直線と紡錘形、イーゼルの三角形、額縁の四角形などの形態が、心地よいリズムを生みだしています。

よく見ると、その輪郭線は背景に滲んで、かすかなゆらぎを感じさせるかのような印象があり、マティエールもまた同様に、永年慈しみ愛用品のような手ざわりやぬくもりがあります。安定した構図と穏やかな色彩に加え、こうした要素が全体にくつろいだ印象を与えるのでしょうか。テーブルや床面は、上からの視点でとらえられているため、見るものは卓について室内を眺めているかのように感じられます。

笠井誠一●KASAI,Seiichi (1932-)
1986年(昭和61) 麻布・油彩 116.7cm×90.9cm
平成14年度購入



当初は楽器や工具、厨房用具といった無機物が画面の主役でしたが、この頃より観葉植物をはじめ、花や果実などが笠井の画面に彩りを添えるようになりました。

(豊橋市美術博物館学芸員 丸地加奈子)

本作品は2階常設展示室で3月28日まで展示しています

編集後記

21世紀に入って10年、世界中がいま変革の時を迎えてます。豊橋に住み、恵まれた自然を愛し穏やかに暮らしていく中、知らず知らずに世の流れの影響を受け、私たちの感性も変化しているのでしょうか。

豊橋市美術博物館は、30年を経て新館の建設が広く期待され、市の第4次基本構想に入っていましたが、財政難から先送りとなりました。それは残念でしたが、この機会に次の時代のための思い切った斬新なミュージアム構想ができるのでしょうか。子どもや若い人たちに夢を描いてもらい、ビックリするようなものができたら、ミュージアムが時代をリードする新しい力になるでしょう。そんな天才が出てこないかな・・・私の初夢でした。

(神野能生子)

【表紙作品】

齊藤義重《作品》
1962年 油彩・ドリル、合板 181.8cm×121.4cm
愛知県美術館蔵
「ひかり・いろ・かたち」展より

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第75号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会

会長 宮田正人

担当副会長 神野能生子

編集長 鈴木伊能勢

編集委員 福島陽子 金田順子

協力 豊橋市美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882

平成22年2月20日発行(5月・8月・11月・2月各20日発行)

平成10年3月17日 第3種郵便物認可 定価200円

※会員は会費に含みます。※定価には消費税が含まれます。